

# 漢唐時期の西域仏教とその東伝ルート

王 欣

## Buddhism in Xi Yu (the Western Regions) during the Han and Tang Dynasties: Its Eastward Paths

Xin WANG

### Abstract

Buddhism in Xi Yu(the Western Regions) gradually emerged and developed during the period between the Han and Tang Dynasties. This was also the primary historical circumstance for its spread eastward, which occurred due to the official opening of the Silk Road and partial political uniformity in Xi Yu (the Western Regions). Several Buddhist centers with diverse characteristics have existed in Xi Yu (the Western Regions), and several paths enabled Buddhism to spread eastward from these areas. The first included monks from Xi Yu (the Western Regions) travelling to inland China to propagate Buddhist teachings. The second involved monks from the interior going to Xi Yu (the Western Regions) to seek Dharma. The third was the political communication between the inland and Xi Yu (the Western Regions). The fourth was the inland regime's military expedition to the Western Region. The fifth was the population migration between the inland and the Western Region. The sixth was commercial trade between the inland and the Western Region. Through these multiple and bidirectional paths, Buddhism in the Western Region had a profound effect on the development of Buddhist culture inland.

## はじめに

### 一、時空概念の定義

中国史の各時期において、西域の概念及び、それが指し示す具体的な範囲は時代の変化とともに変化していくものの、大体狭義・広義の両方面から理解できる。一般的に、広義の西域とは陽関と玉門関以西のヨーロッパ・アジア大陸を指すと考えられている。西域とは既に一つの地理概念で、広く内地（関内）以西の広大な地区を指し、同時に一つの民族的・文化的概念で、広く漢文化圏以西の諸民族と文化分布地域を指す。狭義の西域とは帕米爾（パミール）以東・敦煌以西・アルタイ（アルタイ）山以南と崑崙山以北の区域を指し、おおよそ天山南北の准噶尔（ジュンガル）盆地と塔里木（タリム）盆地に相当し、また今日の新疆地区である。狭義の西域とは

一般に各時期の中央王朝の有効統治区域を指し、前漢西域都護の設立（公元前60年）より始まり、清朝中期に至って基本的な形が定まるのだが、その具体的な範囲はこの期間において幅がある。以上から、狭義の西域とは一つの地理的・民族的・文化的概念であるだけでなく、同時に極めて政治的意義を持ち、その内地と中央王朝の政治的一体性を示している<sup>(1)</sup>。本文で検討するのは正に狭義の西域についてである。

漢唐時期の仏教の中国への伝播路は大体海路と陸路の二つに分けられ、その中の海路（南道）で伝播した教義は主に小乗仏教の説一切有部で、陸路は大乗仏教が主である。古代仏教が陸上のシルクロードに沿って東方へ伝播し発展していく過程の中であって、西域地区は必ず経過する地であるだけでなく、地域文化の特徴を備えもつ西域仏教も内地の漢伝仏教の隆盛に対して非常に大きな影響を産み出した。

漢唐時期は正に仏教が西域に伝わり、さらに西域仏教が起り、形成・隆盛した重要な歴史的段階であり、同時に西域仏教が東に向い発展して中原仏教へも重大な影響を与えた時期でもある。こういったことだけでなく、この歴史的時期において、西域仏教と中原仏教は各種のルートを通じて頻繁に交流し、シルクロード東側と中側の仏教文化を発展させ、歴史的ピークを迎えた。

## 二、漢唐時期の西域仏教の遺物

仏教の東伝は間違いなく一つの漸進の過程で、西域地区でもまた同じようなものである。現在塔里木(タリム)盆地で発見された早期仏教の遺跡の大部分は両漢の交替の際に集中しており、仏教の西域における伝播は時間的にはほぼ内地と同時であろうことをはっきりと表しており、その過程は抽象教義の導入からイメージ化した彫像や寺院の建造と石窟の開削に至るはずである。

鄯善の地は西域に進出するための門戸に当り、東は敦煌に連なり、西はシルクロードの南北の両道に接し、歴史上かつて東西文明が一か所に集まる所で、魏晋時期において、鄯善国は国王から平民に至るまで皆な小乗仏教を信奉した。このようであるだけでなく、ここの仏教芸術も深く犍陀羅(ガンダーラ)早期文化の影響を強く受けている<sup>(2)</sup>。しかし戦乱と生態環境の悪化等の原因によって、五世紀以後に鄯善王国が消滅し、その仏教はこの後も次第にうずもれ聞かれなくなった。ただ楼蘭と尼雅(ニヤ)等の遺跡中には沙漠によって埋没し、大量に残存した仏寺と仏塔があり、当地の仏教の昔日の繁栄を証明している。

漢唐時期の于闐(ホータン)は「仏国」として著名である。仏教は最初印度西北部のかつて深くギリシャ文化の影響を受けた犍陀羅(ガンダーラ)(今のアフガニスタン、ペシャワール附近)、罽賓(カシュミール)等の地を通り西域に伝ったもので、于闐は真っ先にその矢面に立った。地理上の原因によって、于闐は昔からこの地区と密接な関係を維持し、政治・経済・文化等の方面において受けた影響は比較的大きかった。迦湿弥羅(カシミール)国は最初小乗仏教の中心で、そのため初期于闐仏教は小乗を中心としていたようである<sup>(3)</sup>。魏晋に入ってから以後、この情況に大きな変化が起こり、大乘・小乗

の教義が並行し始めた。少なくとも公元5世紀初期までには、大乘仏教の勢力は于闐においてすでに優勢になっており、小乗教派は次席に退いた。于闐の上は国王から、下は平民に至るまで均しく仏教徒で、仏教は明らかに既に国教となっていた。もとの于闐国国内に現存している仏教遺跡は主に杜瓦(トゥーガ、Tuga-dong) 仏寺遺跡、布特列克仏寺遺跡、喀孜勒克(カズラック) 仏寺遺跡、熱瓦克(ラワク) 仏寺遺跡、烏宗塔提(ウズン・タティ) 仏塔遺跡、班勒庫木(ベール・クム、Bel-kum) 仏寺遺跡、布蓋烏依里克仏寺遺跡、庫木拉巴特(クム・ラバート、Kum-rabāt) 仏寺遺跡、丹丹烏里克(ダندان・ウィリク) 仏寺遺跡、喀拉墩(カラドン) 仏寺遺跡と達瑪溝(ドモコ) 仏寺遺跡等がある。

于闐はシルクロード南道の仏教の中心で、龜茲はシルクロード北道の仏教の中心である。魏晋から隋唐時期に至るまで、ここに寺院は林立し、僧尼の数が非常に多く、著名な高僧鳩摩羅什はかつて天竺仏教の西域への導入及び西域仏教の内地への東伝過程において極めて重要な役割を發揮した。庫車地区には現在大量の仏寺遺跡と石窟寺が保存されており、例えば克孜爾(キジル) 石窟群・庫木吐拉(クムトラ) 石窟群、森木塞姆(シムシム) 石窟群・克孜爾尕哈(キジルガハ) 石窟群・瑪扎伯赫(マザバハ) 石窟群・阿克塔什石窟群・托乎拉克埃肯(トクラック・アキン/トクラック・アイガン) 石窟群・台台爾(タイタイトル) 石窟群がある。この外にはやはり博斯坦托格拉克(ボスタン・トクラック) 石窟、依斯蘭賭娃石窟、卡拉蘇(カラス) 石窟、多崗石窟、薩卡特克石窟・温巴什(ウェンバシ) 石窟・一滴泉石窟・蘇巴什(スバシ) 等の仏寺遺跡がある。石窟群は、やはり仏寺を伴った遺跡である。これらの規模宏大な仏教洞窟と仏寺遺跡は基本的に皆な魏晋南北朝期に開削或いは建造されたもので、唐代に至って最盛期となる。こういったことも、この時期の龜茲が北道仏教の中心として仏教が繁栄していた一部を反映している。魏晋隋唐時期の焉耆仏教は龜茲と同じように、小乗仏教を主とした地区である。焉耆内に現存している仏教遺跡には七个星(シクシン) 仏寺遺跡(別名は明屋(ミン・オイ) 仏寺遺跡)・七个星(シュルチュク) 仏教石窟と霍拉山仏寺遺跡等がある。

シルクロード南北道の交り集まる場所となった、疏勒も仏教の一つの要衝である。于闐・龜茲等の国

と同じように、仏教は疏勒でも国王の信奉と支持を得た。もとの疏勒国の国内に現存している仏教遺跡には沙依拉木（サイラム）仏教石窟・脱庫孜吾吉拉石窟（三仙洞）・旗盤郷石窟・刻太克石窟・克斯勒塔格（キジル・ターグ）仏寺遺跡・托庫孜卡孜那克（トックズ・カズナック）仏寺遺跡・達克牙魯斯夏雷（ダキヤヌス・シャル）仏寺遺跡・明堯勒仏塔遺跡・卡瑪洞仏塔遺跡・喀勒乎其農場仏塔遺跡・克克勒瑪仏寺遺跡・図木秀克（トゥムシユク）仏寺遺跡・脱庫孜薩来（トックズ・サライ）仏寺遺跡・刻太克仏寺遺跡・莫爾（マウリ・ティム）仏塔遺跡と杏園仏寺遺跡等がある。

漢唐時期の吐魯番地区の仏教は、ほぼ二つの発展段階を経ている。一つ目は早期の車師仏教、二つ目は高昌仏教である。仏教は高昌の伝播にあつては、当地の伝統的漢文化に適応し、あわせて民間において発展した家族の力の助けを借りた。したがって仏寺の「像廟星羅、僧櫬云布」の局面を現し、併せて家族化の特徴を備えている。控えめに見積もっても、すでに高昌城附近は「仏寺三百余座、僧尼逾三千人（仏寺三百余り、僧尼は三千人を超える）」の状態であった<sup>(4)</sup>。吐魯番地区に現存している晋唐時期の仏教遺跡は主に交河故城仏寺（塔）遺跡・高昌故城仏寺（塔）遺跡・柏孜克里克（ベゼクリク）仏教石窟群・雅爾湖（ヤール・コト）石窟群・吐峪溝（トユク）石窟群・勝金口（勝金口／センギム）石窟・拜錫哈（バシハル）石窟・七泉湖（チukkan・コル）石窟・蘇貝希（スバシ）石窟・小桃児溝石窟・大桃児溝石窟・忙得古爾（マンダ・ゲーリ）石窟・徐干山石窟・葡萄溝（ブライク）仏塔2座・阿瓦提仏塔・烏江布拉克（ウジャンブラック）仏塔・勝金口（勝金口／センギム）仏寺・勝金口（勝金口／センギム）舍利塔群・阿斯塔那（アスターナ）仏塔・克其克阿薩（キチック・アサ）仏塔・色爾克普（シルカプ）仏塔・塔木古塔什佛像刻石・西格力克塘木仏寺遺跡等がある。

伊吾は後漢以後「西域の門戸」となったが<sup>(5)</sup>、戦乱が断えず民族遷徙が頻繁であったために、漢唐時期のある地区の仏教流行の状況は文献の記載中にはっきりとしているわけではない。哈密地区に現存している主な仏教遺跡には卡俄爾仏塔・艾勒克吐爾仏寺遺跡・庫木吐魯仏寺遺跡、托瑪仏寺遺跡、甲郎聚龍仏寺遺跡・恰普北仏寺遺跡・白楊溝（白楊溝、別名ラプチュク）仏寺遺跡・小泉子南仏寺遺跡・廟

爾溝（廟児溝、別名アラ・タム）仏寺遺跡・央打克（ヤンダック）仏寺遺跡等があり<sup>(6)</sup>、歴史的に見て伊吾地区の仏教はやはり極めて繁栄していることが分かる。これらの仏寺の遺跡の多くは唐代或いはそれ以後に属し、漢唐時期の伊吾の歴史を結合してみると、伊吾仏教の繁栄期はまさに唐が伊州を建立して以後に属すはずだ。

### 三、西域仏教東伝のメインルート

仏教は最初中央アジアの貴霜王国（大月氏）から直接中国内地に導入されたのではあるが、魏晋以後の西域仏教の全面的出現・発展・成熟によって、その内地仏教への影響も断えず深まり、持続している。晋唐時代、これらの西域オアシス諸国で当時仏寺（窟）が林立していく中で、大・小乗仏教の教義が並行し、胡・梵語の仏典が共に現れ、高僧・大徳が頻出し、各々の特色は鮮明であった。したがって西域仏教と仏教文化の発展を起し、繁栄の情勢を呈した。西域と内地の各族の僧侶は仏教によって結びつき、シルクロードに沿って西去求法、東行弘教し、更にすすんで西域における東西方面の各民族文化の伝播と融合を促進した。漢唐時期の西域仏教の東伝とその内地仏教との連動形式は多様で、そのルートは多元的で、概括してみるとほぼ以下の数種になる。

#### 1、西域僧侶東行弘法

西域僧侶の東行弘法は、西域仏教の早期東伝の主な形とルートであった。その中でも于闐・龜茲と高昌僧侶の東行弘法活動の影響は比較的大きかった。于闐僧侶の努力の下、大乘仏教の經典《放光般若經》に「大行華京、息心居士翕然傳焉」とあるような状態となった<sup>(7)</sup>。東行弘法の龜茲僧侶中の最大の功労者は間違いなく鳩摩羅什である。彼は姚秦弘始三年（401年）に長安へたどり着き、十五年（413年）に円寂するまでの十余年間に、広く弟子を招き・妙典を訳出し、遂に「法鼓重震于閩浮、梵輪再轉天北（仏法が重ねて現世を大きく震わせ、梵輪は再び天北をまろぶ）」ようになった。この外に、文献に記載されている中で考えるべき東行弘法の龜茲高僧には白延・帛元信・帛法巨等がいる<sup>(8)</sup>。彼らは内地で訳経・校閲し、もしくは信徒を受け入れ、法を授け、内地における龜茲仏教の伝播に貢献した。

これらの西域高僧の東行弘法手段は携経・訳経・義解（釈経）・明律・唱導の外に、初期にはやはり多くの人々が靈異あるいは神異を用いる方法によって仏法の靈験を示し、漢地伝統の方術習俗に同調することによっている。例えば帛尸梨蜜多羅は「善持呪術、所向皆驗。初江東未有呪法、密訳出『孔雀王經』、明諸神呪、又授弟子覓歴、高声梵唱、傳響于今」<sup>(9)</sup>。これらの神異の方法と手段は内地における仏教の早期弘布に用いられた。とりわけ民間における広大な伝播に顕著な効果を引き起こしたが、ある程度の危険を内在していた。北魏太武帝は太平真君五年（444年）、「沙門之徒、假西戎虚誕、生致妖孽」<sup>(10)</sup>したため、詔を下すことで仏法を滅ぼし、内地の歴史上第一の廢仏皇帝となった。

## 2、内地の僧侶西行求法

西域僧侶の東行弘法活動の展開及び仏教の内地における広大な伝播に随い、内地の仏教界はしだいに受動的な受容にだけでは満足できなくなっていった。これに加えて、早期西域僧侶の訳経は常に「文章隱志」、「訳理不尽」の現象であって、したがって西行して真経を獲得しようとするのは自然と多くの内地の高僧の必然的選択となった。彼らの西行求法の早期の目的地は西域に隣接する地区である。内地の西行求法の第一人者朱士行を例にとると、曹魏甘露五年（260年）に西方の流沙に渡り于闐に至り、梵書の正本九十章を得て、并せて弟子を派遣し、洛陽に返して經典を訳出させ、他自身は最終的に于闐において円寂した<sup>(11)</sup>。晋末宋初以後に、内地の僧侶の西行求法は段々と高潮に達した。内地の僧侶は西域へと求法し、多くは于闐・龜茲に去った。したがって両地の仏教は漢地仏教に対して非常に大きな影響を与えた。当然、一方で古代南アジアをみると、ここは仏教起源の地で、中央アジアの貴霜王国も当時の仏教の中心の一である。もう一方では、仏教は西域に東伝した過程において既に別の変化を発生させている。それ故に来源が多様になっている早期漢地仏教は訳経が晦渋で、意味の多くは誤っているだけではなく、経義は煩雑で、教義は混乱し、戒律は弛れ壊れ、仏教の更なる進歩発展に影響を与えた。このため晋唐時期は更に多くの内地僧侶が西域をこえて、印度と中アジアに向かい、「真経」の獲得を目指して、内地仏教にあった問題を解決しようとした。東晋法顕と唐初玄奘は、この方面の代表

者である。

## 3、政治交流

西域僧侶の東行弘法と内地僧侶の西行求法以外に、両地の統治者の多くは各自の政治目的から、多くは仏教を借りて互いに連絡を取り合い、西域仏教東伝の重要なルートとなった。東晋の弥天釈法師はかつていう「不依國主、則法事不立」、と<sup>(12)</sup>。事実上、漢晋時期の西域仏法は内地において初伝の状態が多く賜りものをした統治者への仏教の利用・支持を發揚した。西域諸国の統治者について述べると、中原の朝貢活動の中にも常に仏教の内容を入り混じらせた。例えば前秦建元十八年（382年）正月に、車師高僧鳩摩羅跋提は車師王弥寔に随って入朝し長安に至って、胡語本の『摩訶鉢羅若波羅蜜經』、『阿毘曇抄』、『四阿含暮抄』等を携さえて献上した<sup>(13)</sup>。龜茲副使羌子侯は中原に使いを出した時、梵本仏経『阿維越致遮經』を携さえて敦煌に至った<sup>(14)</sup>。北魏文成帝末年（465年）に、疏勒国は「其王遣使送釋迦牟尼仏袈裟一」という<sup>(15)</sup>。類似の記載は多くの歴史書に見え、枚挙にいとまがない。

## 4、軍事征伐

軍事征伐はこの時期の仏教が西域より内地に東伝する一種特殊なルートであって、実際政治交流の延長とみなせる。この方面の典型例は前秦皇帝苻堅の時の龜茲高僧鳩摩羅什にみえる<sup>(16)</sup>。呂光は龜茲を破った後、羅什を携えて東の涼州に帰った時に苻秦は已に亡んでいた、羅什はまたここで妨害を受けた。後秦弘始三年（401年）に、姚興は呂氏を大破し、鳩摩羅什はようやく長安に迎え入れられることができ、最終的に内地への影響が深い一代の仏教の師となった。これらの軍事征伐活動の主な目的は必ずしも西域の高僧・大徳入手のためではなかったが、客観的にはやはり西域仏教の内地における伝播を促進した。

## 5、人口遷徙

「道由人弘、法待縁顯」<sup>(17)</sup>。古代シルクロード上の人口遷徙活動も仏教伝播の一つの重要なルートである。例えば西域の鄯善王国における仏教の唐突な変化の現れは、すなわち貴霜移民と関連のある可能性がある<sup>(18)</sup>。漢晋時期、大量の内地移民の不断の遷入に随って、漢地仏教は高昌に伝入し、ここを

次第に西域漢伝仏教の中心とならしめた。こういったことだけでなく、晋唐時期の多くの高昌僧侶による西去・東行の弘法活動は、シルクロードの各地の仏教の交流と発展にも顕著な貢献をなした。例えば北凉時期の高昌高僧道普はかつて「経游西域、遍歴諸国、供養尊影、頂戴仏鉢、四塔道樹、足迹形像、無不瞻覲。善梵書、備諸国語、游履異域」し、後に南朝に入って弘法した。これより分かるのは、仏教のシルクロードに沿った伝播ルートは決して片側ではなく、双方向に影響を与えるものである。

## 6. 商業貿易

仏教は印度で生まれ、伝播活動の多くは当時の商業貿易活動と関連があり、仏教の南アジアと中央アジアにおける伝播ルートはつまり当時の商業貿易のルートと一致する。「商人與仏教互相依頼、互相影響、商人靠仏教發財、仏教靠商人伝布（商人と仏教は互いに依存し、互いに影響しあい、商人は仏教に頼り財産を作り、仏教は商人に頼り広まった）」のである<sup>(19)</sup>。シルクロード開通とシルクロード貿易の隆盛は、仏教東伝のために交通の便利と物資の基礎を提供した。漢唐時期の西域諸国と内地との貿易の多くは「奉獻」もしくは「朝貢」の名義によって行われていた。『三国志』に「魏興、西域雖不能尽至、其大國龜茲・于闐・康居・烏孫・疎勒・月氏・鄯善・車師之属、無歲不奉朝貢、略如漢氏故事」とある<sup>(20)</sup>。唐貞観十四年（640年）に高昌を平定した後、「伊吾之右、波斯以東、職貢不絶、商旅相継」となった<sup>(21)</sup>。これらの西域各地の中でも「仏国」于闐・龜茲等から来た商人は、内地への貿易と同時に、知らず知らず彼らの信奉している民間仏教を導入した。この種の民間仏教の伝播は、僧侶の動きほどには注目されなかったが、却って知らず知らずの間に思想の変化をもたらした。その仏教東伝への貢献は、文献記載の欠失によっても後人の忘れるところとはならなかった。

## 注

(1) 後漢和帝（公元 88-105 年在位）期成書の『漢書』西域伝が最も早く明確に「西域」の範囲を定義づけた。「西域以孝武時始通、本三十六国、其后稍分至五十余、皆在匈奴之西、烏孫之南。南北有大山、中央有河、東西六千余里、南北千余里。東則接漢、扼以玉門、陽關、西則限以葱崙」、同時に「西域諸国大率土著、有城郭田畜、與匈奴、烏孫

異俗」と記載がある。したがって、前漢時期の「西域」で指し示す範囲は乃ち塔里木盆地オアシス諸国で、実際は西域都護の管轄区域で、すなわち所謂狭義の西域である。しかし同伝に記載されている内容はここにだけに限らず、やはり葱崙以西の安息・大月氏・大夏・康居・大宛及び天山と天山以北の烏孫等の国を含んでおり、一部の国家はやはり明確に「不属都護」を表明することで区別し、これらは広義の「西域」が指し示す範囲とすべきである。『後漢書』西域伝に記述されている時期は『漢書』と関連のある「西域」の定義範囲を延長したのではあるが、広義と狭義の西域は明確な区分をしている。「西域内属諸国、東西六千余里、南北千余里、東極玉門・陽關、西至葱崙。其東北與匈奴・烏孫相接」とある。この「西域内属諸国」とは狭義の西域で、明らかに政治的含義がある。

- (2) 沈福偉『中西文化交流史』（第 102 頁、上海人民出版社、1985 年）を参照。
- (3) 羽溪了諦著・賀昌群訳『西域之仏教』（第 139-140 頁、商務印諸館、1999 年）。
- (4) 呉震『寺院經濟在高昌社会中的地位』（『新疆文物』（1990 年第 4 期）。
- (5) 『後漢書』卷八十八（第 2914 頁、中華書局、1965 年）。『隋書』裴矩伝所録の《西域図記》の序言の中に「其三道諸國、亦各自有路、南北交通。其東女国・南婆羅門国等、并随其所往、諸處得達。故知伊吾・高昌・鄯善、并西域之門戸也」と述べる。
- (6) 上述の新疆区内に現存している仏教遺跡の分布状況については、新疆維吾爾自治区地方志編委員会・『新疆通志・文物志』編纂委員会『新疆通志・文物志』（第 218 頁-260 頁、新疆人民出版社、2007 年）を参照。
- (7) 積僧祐撰、蘇晋仁・蕭鍊子点校『出三藏記集』（第 265-266 頁、中華書局、1995 年）。
- (8) 湯用彤『漢魏兩晋南北朝仏教史』（上册）（第 196-197 頁、中華書局、1983 年）を参照。
- (9) 積慧皎撰・湯用彤校注『高僧伝』（第 30 頁、中華書局、1992 年）。
- (10) 『魏書』卷四下（第 97 頁、中華書局、1974 年）。
- (11) 積僧祐撰、蘇晋仁・蕭鍊子点校『出三藏記集』（第 515-516 頁、中華書局、1995 年）。積慧皎撰・湯用彤校注『高僧伝』（第 145-146 頁、中華書局、1992 年）。
- (12) 『四十二章経序』。
- (13) 積僧祐撰、蘇晋仁・蕭鍊子点校『出三藏記集』（第 289 頁、中華書局、1995 年）。
- (14) 積僧祐撰、蘇晋仁・蕭鍊子点校『出三藏記集』（第

- 274 頁、中華書局、1995 年)。
- (15) 『北史』卷九十七 (第 3219 頁、中華書局、1974 年)。
- (16) 釈僧祐撰、蘇晋仁・蕭鍊子点校『出三藏記集』(第 532 頁、中華書局、1995 年)。
- (17) 釈僧祐撰、蘇晋仁・蕭鍊子点校『出三藏記集』(第 1 頁、中華書局、1995 年)。
- (18) 吳焯『仏教東伝與中国仏教芸術』(第 254-256 頁、浙江人民出版社、1991 年) を参照。
- (19) 季羨林『商人与仏教』、元は『第十六届国際歴史科学大会中国学者論文集』(中華書局中、1985 年) に載る。『季羨林學術論著自選集』(第 518 頁、北京師範学院出版社 1991 年) に収められる。
- (20) 『三国志』卷三十 (第 840 頁、中華書局、1959 年)。
- (21) 『册府元龜』卷九八五。